

人文会 ニュース

jinbunkai news

August 2026

NO. 153

1 代表幹事挨拶

2 15分で読む

文化大革命終結・毛沢東没後50年

19 書店現場から

人文書と人文会とともに歩んだ二十年

24 編集者が語るこの叢書・このシリーズ 32

近代日本メディア議員列伝

——「メディア議員研究」の射程

委員会活動方針

人文会活動報告

人文会年次総会報告

片桐幹夫

高橋伸夫

喜田浩資

佐藤卓己



www.jinbunkai.com

慶應義塾大学出版会

<https://www.keio-up.co.jp/>

時間を哲学する 思考のためのツールボックス

平井靖史編 時間を哲学するために必要なツールと知識をコンパクトにまとめ、ジェイムズ、フッサール、ベルクソン、ホワイトヘッド、ハイデッガーの実践から立体的に学ぶ、「時間の哲学」の決定版ガイドブック。◎2,200円

兵士とリゾート

米軍保養地と日本観光の戦後史

阿部純一郎著 占領から冷戦、そして現代へ——。不可視化されてきた「米軍の余暇」という視点から、朝鮮・ベトナム戦争の「銃後」に組みこまれた日本観光の構造を、日米の膨大な資料から解き明かす、注目の一冊。◎2,750円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

戦後80年を超えて

決定版

日本の戦争遺跡

戦争遺跡保存全国ネットワーク編

日本各地の研究者・教師・市民100余名が結集し、最新の研究成果を集めた決定版。調査方法や遺跡保存・継承の問題など研究の最前線についての論考のほか、海外も含めた国約250件の戦争遺跡を豊富な図版付きで収録。

●税込価格・14300円

大月書店

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-27-16

TEL 03-3813-4651 WEB otsukishoten.co.jp

新しい図書館で イベントを企画する

石川県立図書館の挑戦

田村俊作【監修】

宮原佑介・空 良寛・長谷部涼子

石川県立図書館は22年の移転新規オープン以来、特色あるイベントで多くの来館者を集める。開館・運営とイベント企画の貴重な記録。

税込2970円

掌の美術論

触覚と想像力

松井裕美

身体を通して、世界に触れ、世界と戯れ、世界を模倣し、そして世界とずれていく。そのずれの中にこそ、芸術の可能性は宿っている。

税込4400円

けい そろ
勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<https://www.keisoshobo.co.jp>

刑務所の 文章教室

言葉が心をほぐるとき

大塚敦子

ブレイディみかこさん 推薦!

「この教室で学びたくなる人はたくさんいるのではないか」

闇バイトに応募した学生、キヤパを超える業務でうつになり覚醒剤に手を出した会社員、ホストにハマって特殊詐欺の受け子をしてしまった女性……受刑者たちはどのような文章を紡ぎ、どのように変わっていったのか。心に沁みるノンフィクション! ▼税込2200円

紀伊國屋書店

出版部: 東京都目黒区下目黒 3-7-10
営業 TEL 03(6910)0519

代表幹事挨拶

みすず書房 片桐幹夫

2026年5月15日に開催された人文会年次総会において、代表幹事を拝命いたしました。これらの一年を、会員社の皆様と、次世代のために未来を切り拓く一歩となるよう力を尽くす所存です。何卒よろしくお願い申し上げます。

今期の人文会は、従来の販売・企画委員会と調査・研修委員会を統合し、新たに「販売・研修委員会」を立ち上げました。委員長には吉岡聡氏（春秋社）、研修部門の副委員長に森卓巳氏（青土社）が就任、販売部門の副委員長には郡司恵太氏（誠信書房）を迎え、研修活動から具体的な販売施策までを一貫して実行できる体制としました。さらに、2年後に迫った大きな節目（人文会創立60周年）に向け、同委員会内に「60周年企画グループ」を設けました。その他の幹事もこれまでの知見を活かすべく再任され、新しい期に臨みます。一方で、大変残念ながら、勁草書房、晶文社、平凡社、法政大学出版局の4社が本年、休会されたことをご報告申し上げます。

周知の通り、書店数の減少や深刻な物流の逼迫、大幅な製作コスト上昇など、逆風は止みません。しかし、人文書ロングセラーの多くは前年を上回る実績を上げており、読者の皆様の「本質的な知への要求」は全く変わらず強いものであると感じます。さらに、人文書の持つ価値を信じ、共に拡販施策を実施してくださる書店法人様、知のインフラである図書館様との連携は年々、強力なパートナーシップへと育っています。

創立60周年を2年後に控えた今期、人文会はさらに書店様、図書館様、流通関係の皆様との「対話」を深め、新たな施策を実践すると共に、これから先の60年を見据え、新たな執行部を育ててゆきたいと考えています。厳しい現状を直視しつつも、人文書が持つ力を信じ、人文会正担当全員が知恵を絞り、明るく挑戦的な活動を形にしていきたいと思います。

本年も、役員ならびに各委員への変わらぬご指導・ご鞭撻を、何卒よろしくお願い申し上げます。

文化大革命終結・毛沢東没後50年

高橋 伸夫（慶應義塾大学名誉教授）

はじめに——狂気の時代としての文革

文化大革命（正式な名称はプロレタリア文化大革命、しばしば文革と略称される）は狂気に支配された時代として知られる。毛沢東の写真が掲載された新聞紙で靴を磨いていた男が反革命の罪で拘束された。猫の首に毛沢東バッジをつけて遊んでいた子供と母親も同様の罪で拘束された。赤はよい色であるという理由で、赤信号で進むことが実践された。電話をかける際も、まず革命のスローガンを叫んでから用件を述べた。航空管制さえそうだったらしい。

このような狂気は、最高指導者に対する圧倒的な個人崇拜の原因でもあり結果でもあった。『毛主席語録』は

10億冊も印刷され、中国全土に行き渡っただけでなく世界に溢れ出した。歴史上、出版部数においてこれを上回るのは聖書のみである。毛沢東バッジは25億個以上も製造され、ほとんどの中国人が身につけた。大きなバッジほど、より大きな忠誠を示すことができると思なされたため、バッジは次第に大きくなり、ついには直径30センチを超えるものも現れた。どこにつけたか。通常は、左胸の心臓の少し上あたりにつけた。だが人によっては、強い忠誠を示すために肌に直接つけた（つまりピンを肌に刺した！）のである（Leach, p. 108; pp. 215-216）。手術台に上って、妊娠中絶に臨む若い女性は「毛沢東思想を活用して」痛みに耐えると言った。それどころか、「信仰療法」によって癌が根治したと主張する者さえ現れたのである（スノー、46頁および75頁）。

とはいえ、狂気に支配されるなら、第二次世界大戦中のドイツも日本も同様であった。文化大革命下の中国が特別だったのは、国民同士が各地で武装闘争を展開し、ほぼ全面内戦の様相を呈したことである。延々と続く武装闘争により、当然のように生産活動は停滞した。大学での授業は行われなくなった。北京のイギリス大使館事務所には火が放たれ、ロンドン、パリ、ラングーン、ジャカルタでは現地の中国人と警官隊が衝突していた。そのため、中国は国際的に孤立した。こんにち中国共産党の党員たちはこう教えられている。文革は「党と国家と各族人民に建国以来最も深刻な挫折と損失を与えた」(郭德宏主編、217頁)。すさまじい破壊の後で指導者たちはふと我に返り、文化大革命とはまったく逆の方向を向いて走り始めた。それが今日まで続く改革開放である。

「短い文革」と「長い文革」

この事件はいつ始まり、いつ終わったのか。一般的な理解に従えば、文化大革命は1966年5月の中共中

央通知(五・一六通知)によって幕を開け、1976年10月のいわゆる「四人組」(江青、張春橋、姚文元、王洪文)の失脚によって幕を閉じた。中国共産党自身の理解もそうである。「10年におよぶ大動乱」という表現が中国ではよく用いられる。だが、筆者は少し異なる理解の仕方を提唱している。いわば「20年におよぶ大動乱」である。すなわち、1966-76年を「短い文革」とみて、1963-84年(あるいは85年)を「長い文革」とみる理解である。1963年には社会主義教育運動が始まり、農村各地で暴力的な幹部の入れ替えが行われた。その激しさは文革に劣らなかった。文革はこの運動の延長線上において、しかも運動の当事者たちからはほとんど区別されることなく開始されたのである。一方、文革が解き放った暴力は「四人組」の逮捕後も止むことがなく、1980年代半ばまで続いた。したがって、一般に改革開放の起点とされる1978年末以降も文革の余韻はしばらく消えなかった。言い換えれば、改革開放が始まった1980年代前半は、一方で人々が文革と正反対の方向を向いて走り始めた時代であったが、他方で深く混乱し、ひどく暴力的な時代でもあったのである。こ

の「長い文革」というパースペクティブにおいては、三つの政治的「地震」が連続して訪れる。1963-66年の前震、1966-76年の本震、そして1976-84年（あるいは85年）の長く続く余震である。

文革の歴史的背景

文化大革命は毛沢東時代の最後に訪れた。この根っからの革命家は旧体制を破壊することには無類の手腕を發揮したが、自らが打ち立てた新体制を改良しながら運営していくことについては得意ではなかった。いや、そもそも関心がなかったのである。彼の「治世」（1949-76年）は、その始まりは希望に包まれていたとしても、1956年以降は次第に破滅の影が濃くなっていった。同年2月にソ連共産党書記長フルシチョフが有名なスターリン批判を行い、これが毛と中国共産党にとって重大な転機となる。というのも、それまで中国は、スターリンが指導するソ連をあらゆる点において模倣してきたのに、書記長によってスターリンの政治運営が恐るべき欠陥をはらんでいたことが暴露されたからである。ここ

から「中国的特色を持つ」社会主義の模索が開始された。そしてこの模索が、次第にその度合いが増してゆく破壊と混乱を中国にもたらしたのである。

スターリン批判の直後、毛沢東は他の指導者たちの反対を押し切って、百花斉放・百家争鳴と呼ばれる社会主義の歴史においては前代未聞の言論の自由化に踏み切った。ただし、それは反革命肅清運動という国民の計画的殺人を含む恐るべき政治運動と並行して進められた。そのため、この自由化の企ては、知識人からの激しい共産党批判を招来した。衝撃を受けた毛は態度を翻し、1957年5月に知識人に対する大弾圧を始めた。これが反右派闘争である。以降、中国の知識人は政治的にはほぼ完全に沈黙して今日に至る。毛は知識人をこっぴどく打ちのめして鬱憤を晴らしたとはいえ、すっかり面目を失ってしまった。彼は評判を取り戻すため、1957年秋より大躍進政策を開始した。これは工業と農業の生産力を短期間のうちに飛躍的に引き上げてイギリスとアメリカを追い越し、一気に共産主義に到達しようとする野心的な試みであった。その過程で生まれたのが農村の人民公社である。しかし、この企

ては非正常死亡（餓死、病死、虐待死を含む）数千万人という見るも無残な結果を伴って終了した。死亡者の数は、2000万人、3600万人、4500万人など諸説ある。だが、疑いもなく、第二次世界大戦において世界で死亡した人々の総数に匹敵するか、それを上回る数の人々が死亡したのである。この大失敗は、さすがの毛沢東をも意気消沈させた。彼の権力から権威が音を立てて剥がれ始めた。そして、劉少奇をはじめとする側近たちが、すっかり荒廃した社会と経済を立て直そうと、毛を蚊帳の外において奔走し始めた。このとき毛は氣力を奮い起こし、政治的主導権を奪い返そうと、一か八かの賭けに打って出る。そのとき彼が掲げた旗印が「階級闘争」であった。毛の見解そのものという中央委員会総会のコミュニケ（1962年9月）にはこう記されている。

プロレタリア革命とプロレタリアート独裁の全歴史時期において、資本主義から社会主義への移行の全歴史的時期において、プロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争が存在し、社会主義と資本主義の二つの道の闘争が存在する。覆された反動統治階級は滅亡

に甘んじることなく、つねに復活を目論んでいる。

毛の主張の意味はこうである。食糧不足など取るに足りない問題である。中国の社会主義はもっと大きな危険に直面している。それは革命の成果がブルジョアジーによって奪い取られかねない危険である。同志諸君、この危険を直視し、再び階級闘争に立ちあがり反動階級の復活を阻止せよ。彼はこの主張を、大躍進による荒廃から人々の目をそらし、その無謀な企ての失敗の責任を「ブルジョアジーの残余」、「右派」、「反動分子」などに転嫁しながら、政治的主導権を奪い返すために用いたのである。

賢明な読者はすでにお気づきのことと思うが、この人物は大きな失敗をしでかしても、決して自分の責任を認めることなく「前方へ」逃げ、新たに途方もない事業に乗り出すのである。こうして1963年、まず農村で階級闘争を強化するという名目で社会主義教育運動が開始された。「教育」と名がついているが、実際には農村の幹部たちを力づくで大規模に入れ替えた（よく「奪権」という表現が用いられた）のである。多くの場合、奪権

は流血を伴った。これは文化大革命のリハーサル、いや文革そのものといってよかった。社会主義教育運動は1969年から70年まで続く予定であったが、その途中で、唐突に文革が始まったのである。

構想なき「革命」の始まり

以上の文革の始まりに関する説明は、従来の一般的な説明とは異なっている。従来の説明は二つのタイプに分かれる。ひとつは、毛沢東はある種の崇高な理念あるいは信念に導かれて文革に乗り出したというものである。

もう一度、毛の代名詞ともいうべき階級闘争の問題に帰ろう。この指導者は、1956年秋以降、中国において階級闘争はすでに終わりを告げたという党の公式の評価に逆らって、それは「まだ終わっていない」といい、次に「終了した」といい、その後「まだ終わっていない」といった。だが、熾烈な階級闘争が続いているという主張は、1960年にはほとんど聞かれなくなった。この主張は1961年に復活するが、次第に毛の意識は階級闘争というよりは「反修防修」（修正主義に反対

し、修正主義を防止する）に注がれるようになった。そして、階級闘争において誰が敵なのかという問題について、彼が最終的にたどり着いた答えは、「階級」ではなく「派」、すなわち「資本主義の道を歩む実権派」これを打倒することが文革の最も重要なスローガンとなる）であった。かくもあやふやで、一貫性のない人間に確固たる信念などなかったとみるほうがよいと筆者は考えている。理念が文革を生み出したのではない。政治が文革の「理念」らしきものを事後的に作り出したのである。

文革の始まりに関するもうひとつの説明は、重要な側近を打倒することが目的だったとするものである。1962年1月、1962年7月、1965年1月、1965年5月（ほかにまだある）のいずれかの時点で、毛沢東が最側近であった劉少奇国家主席の打倒を決意し、そのための計画を着々と練りながらタイミングを見計らい、1966年5月、ついに計画を実行に移したというのである。だが、この陰謀説には確たる根拠が欠けている。毛の著作や講話記録をどんなに細かく点検しても、ある時点で、彼が劉およびその他の指導者を失脚させようと決断した確実な証拠は見当たらない。むしろ

ろ、史料から浮かび上がるのは、何も決断していない毛の姿である。たしかに、彼は自分の死期が迫っていることを意識して最後に何か大きなことをやる気になっていた。しかし、この「何か」はどこまで行っても「何か」のままであった。

それでも、政治的主導権を取り戻すための賭けはうまくいった。いや、むしろうまくいきすぎた。このままではブルジョアジーの手に権力を奪われるという毛の主張に、当初、中央の指導者たちの大半は半信半疑であったが、地方の指導者たちが過剰反応しはじめ、やがてそれが大きなうねりとなって、1964年秋までには、指導者たちは皆、もういっぺん革命をやり直すという気になっていたのである。だが、その革命なるものは誰を敵とし、その敵をどのように打倒するのか、彼らはまったく理解していなかった。そもそも、毛の意図するところがあるにも曖昧だったからである。

とらえどころのない最高指導者の言葉は、悪意ある一部の側近たちによって利用された。康生（中国のベリヤと称されることもある人物）、江青（毛の妻）、陳伯達（党内きってのイデオログ）、林彪（国防部長）といった面々である。彼

らは、毛主席の意思に反して階級闘争に反対し、中国を修正主義に墮落させかねない人々がいると虚偽の告発を重ね、1965年秋以降、党内で粛清の大きな波を作り出すことに成功する。毛はこの波を大きくすることに夢中になり、最後には自らがその波にのまれてしまった。毛がその剛腕で他の指導者たちを文革へと引きずっていったという解釈は当たらない。どちらかといえば、彼は状況に受動的に対応したのである。そのため、文革の綱領は事前に作成されてはいない。事後的に、それも読む者を惑わせるような曖昧な調子で書かれた文書（1966年8月に発表された「プロレタリア文化大革命についての決定」）が作成されたのみである。このようないきあたりばったりの性格のために、文革の過程は混乱に満ちたものとなった。

それにしても、なぜ「文化」大革命なのか。幹部の大量粛清がその主たる内容であったとすれば、わざわざ名称に「文化」を冠する必要はないであろう。それは、この企てが「ブルジョア階級とすべての搾取階級のイデオロギーを批判し、教育を改革し、文学・芸術を改革し、社会主義の経済的土台に適應しないすべての上部構造を

改革する」ことを目的として掲げたことによる（上記の「決定」）。それでは、なぜ文化の変革が叫ばれたのか。実は、それも毛沢東による政治的主導権の回復の目論見と関連している。この独裁者は、階級闘争こそ現下の大事といいながら、階級を生み出す経済的土台——下部構造の分析には興味がなかった。あるいは、そのような分析の能力がなかった。そこで彼は1963年以降、中国の文学、芸術、および学術一般はまったく社会主義的ではない、根本的変革が必要であると主張して人々の関心を上部構造の問題へと誘導し、それらすべての領域において自分が最終審判者であるかのように振舞い始めたのである。とくにそれは哲学の分野において著しかった。つまり、大躍進による荒廃から人々の視線をそらし、他の指導者たちによって奪われかけた政治的主導権を取り戻そうとする努力が、毛を「前方へ」逃避させると同時に「上方へ」も逃避させたのである。

「短い文章」の過程（1）——暴力の噴出

「資本主義の道を歩む実権派を打倒せよ」という毛沢

東の呼びかけに最初に応えたのが北京の高校生たち、大学生たちだった。彼らは自らを紅衛兵と名乗った。左腕に巻いた赤い腕章、胸につけた毛沢東バッジ、そして『毛主席語録』を抱えていることが彼らのトレードマークだった。彼らは大学で教授たちを吊し上げ、街に繰り出して伝統的建築物を破壊し、そして彼らがブルジョアジーの手先とみなした人々をところかまわず殴った。一般に、紅衛兵を含めて既存の秩序の破壊に乗り出した人々を造反派と呼んでいる。

紅衛兵運動は、1966年夏、北京から瞬く間に全国へと拡大する。やがて彼らは毛沢東に会うこと、およびお互いの交流を目的に続々と北京に集まってきた。党中央は、北京にやってくる彼らのために、交通費と食費と宿泊費を無料にした。赤い腕章をみせれば鉄道にタダで乗ることができ、食堂も無料で利用できた。この頃、大学では授業は行われていなかった。だから、ある意味では学生たちにとって幸福な時代だった。

紅衛兵の暴力は1966年夏から秋にかけてピークに達した。8月5日から9月23日までに、北京市だけで1772人の市民が殴り殺された（楊繼繩、15頁）。彼

らの恐るべき暴力性は何に由来していたか。それは最高指導者から暴力を肯定する思想を吹き込まれていたためばかりではなく、中国社会が革命を通じて驚くべき規模と速さで変化したため、それに順応できない古い世代の人々に対して、若者たちが顕著な優位性を手にしたからでもあった。子が親から学べることより、親が知らなくても子供が知っていることのほうが、より多い時代が到来していた。そのため彼らは、まったく傲慢にも、社会の進歩に貢献できないと彼らがみなした「頭が固く」、「遅れた」、「何も知らない」年長者に対して「真理」を叩きこんでやろうとしたのである。

すさまじい暴力の噴出に当初、毛沢東は満足げであった。同年12月26日、73歳の誕生祝賀会の席で、彼は立ちあがって祝杯を挙げる際、通常の政治指導者からは決して聞くことのできない驚くべき一言を放った。「全国的、全面的内戦の展開を祝して！」（高文謙、上、247頁）。

ところで、党中央による「資本主義の道を歩む実権派を打倒せよ」との呼びかけに対して、地方当局者たちは防衛の姿勢をとった。「保守派」とみなされた彼らは、ただ座して打倒されるのを待っていたわけではなかった。

紅衛兵運動に脅威を感じた地方の党委員会は、自分たちの側に学生や労働者を引き付けて紅衛兵に対抗した。そのため、各地で保守派と造反派との武力衝突が生じた。

官僚たちだけではなく、人民解放軍もまた当初は造反派による破壊を阻止する側に立った。軍人の本能は秩序と結びついている。その彼らに、秩序の破壊に血道をあける造反派を支持させるのはそもそも無理だったのである。しかも彼らは、軍内部にも「奪権」が及ぶことを恐れた。だが、毛沢東は軍が文革の局外に立つことを許さなかった。彼は1967年1月、軍に対して「左派」を支援せよとはっきりと命じた。軍人が文革に参加することは、「奪権」に伴う暴力の水準が引き上げられることを意味した。

「短い文革」の過程（2）——破壊と秩序回復のはざままで

全国に混乱が広まるなか、1967年1月、上海で労働者と学生が上海市政府と党委員会を乗っ取ることに成功した。そして彼らは「上海コミューン」の成立を宣言した。これが文革の重要な転機となる。

上海におけるこの動きを毛沢東ははじめ支持した。ところが、軍の長老グループが公然と反対を唱えた。彼らの上海コミューンに対する批判の要点は二つあった。第一に、コミューンは自由な選挙が建前であるが、それを許したら共産党員が代表に選出される保証はない。党の指導はなくてもかまわないのか。第二は、軍の問題である。コミューンにおいて常備軍は廃止される。しかし、軍は社会主義を支える柱ではないのか。その柱を失ってもよいのか。このような批判に毛は激昂し、恐ろしい剣幕で軍の長老たちを叱責した。この事件は後になって「二月逆流」と呼ばれた。

だが、毛沢東は軍の長老たちを叱りつけたものの、結局、彼らの意見を受け入れた。彼は上海の労働者に対して、コミューンの名称を使うことを禁じてしまう。そして、「奪権」後の新しい権力形態として、革命委員会という方式を提唱した。この革命委員会は、革命的幹部軍の代表、そして大衆の代表という三者から構成される——「三結合」と呼ばれる方式——ものとされた。だが、結局のところ、大衆の代表はお飾りに過ぎなかった。また、党組織も崩壊寸前であったために、この革命委員会

においては軍の意向が支配的になった。

毛沢東は1967年6月には、すでに混乱の収束をはかる気になっていた。「三結合」方式によって混乱に終止符を打つ見本にしようと、同年7月、彼は激しい武装闘争が演じられていた武漢に専用列車で乗り込み、争いをやめるよう諸派閥を説得しようとした。ところが、激しい混乱の前に毛は説得することさえかなわず、ほうの体で周恩来が用意した飛行機に乗り込み、上海に逃れたのである。この事件は、混乱を収束させようと考へ始めていた毛に心の迷いを生じさせた。「三結合」は造反派が有利になった条件下でなされるべきだと彼は考えたのだろう。そこで毛は「大量に左派を武装させねばならない」と訴え、造反派を再び鼓舞した。その結果、文革は1967年夏、最も混乱した局面を迎えることになる——中国はまさに「全面内戦」の様相を呈したのである。

さまざまな大衆組織が公然と軍から武器弾薬を強奪した。そのため、各地における保守派と造反派のたたかいは、小銃のみならず機関銃、高射砲、榴弾砲、はては戦車まで繰り出される始末であった。大学のキャンパスの

なかでさえ、学生同士が銃を使って闘争を展開していた。アメリカの研究者、ロデリック・マクファーカーが集めた資料によると、信じがたいことに、長春では造反派の二つの組織が核兵器の開発にまで乗り出しており、初歩的な爆発実験に成功したとのことである（マクファーカーはか、上、310-311頁）。中国の内戦は、核兵器が使われる一歩手前まで行っただけ！ このような経験があるからこそ、現在の中国共産党は秩序への異常な執着をみせるのである。

「短い文革」の過程（3）——暴力による秩序の再建

1968年を迎えると、延々と続く武装闘争に毛沢東も嫌気がさし、ついに文革の「店じまい」を本気で考えるようになった。彼は同年7月28日早朝3時、暴れ放題だった紅衛兵のリーダーたちを集めて、もういい加減にせよ、さもなければ労働者たちを遣わしてお前たちを鎮圧すると脅した。この後、お払い箱にされた紅衛兵たちは農村に送られ、肉体労働に従事させられた。

共産党と政府の官僚機構がずたになったになっていたため

に、秩序回復は軍主導で進めるよりほかなかった。毒は毒をもって制す——暴力は暴力で鎮めるしかなかったのである。革命委員会とは、各地に成立した小さな軍事独裁政権にほかならなかった。そして、軍人たちは、打倒された幹部たちとともに、かつて自分たちを攻撃した造反派に対する大がかりで血なまぐさい復讐を始めた。

1968年以降、「階級隊列を整頓する」運動、「五・一六分子」を摘発する運動、「一打三反」運動という名の運動が連続して起こり、そのなかで大量の人々——主として造反派と目される——が殺された。近年ようやく明らかになった事実は、文革の犠牲者はこの段階において最も多く生み出されたということである。アメリカの研究者アンドリュー・ウォルダーは、各地に残る記録の詳細な研究によって、1966年から71年までの死亡者数を110万人から160万人、そのうち60万人から80万人が「階級隊列を整頓する運動」によるものだと見積もっている（ウォルダー、395-396頁。ただし、160万人という数字は過少かもしれないと少なからずの研究者は考えている）。

ともあれ秩序再建の過程で軍の影響力はこのうえなく

増大した。それはとりもなおさず軍を掌握する林彪の権力の増大を意味していた。1969年4月に開催された第九回党大会で採択された新しい党規約には、林が毛の後継者であることが明記された。だが、党大会で会場を見渡した毛沢東は、あまりにも軍人の数が多いのを目の当たりにして不安を感じていた。折しも、ともに文革の推進者であり受益者でもある林彪のグループと毛沢東の妻である江青のグループは仲間割れを演じ始めた。兩者の争いのなかで、毛は林彪グループからはっきりと距離を取り始めた。このままでは劉少奇の二の舞になると恐れた林彪は、大胆にも、1971年9月に毛沢東を暗殺しようとするが失敗し、妻子とともに飛行機でソ連に逃げる途中、モンゴルの草原に墜落して死亡した。

林が毛にびったり寄り添って文革を当初から最も強力に推進してきたことは中国国民の誰もが知っていた。その人物がとんでもない裏切り者であったということになれば、最高指導者の判断能力に対して、そして文革そのものに対して、党の内外で深い疑念が生じることは避けられなかった。

それでも毛沢東は自分自身を疑うことなく、文革をあ

くまでも継続しようとした。ここから先5年間の物語は文字通りの泥沼である。すなわち、最も忠実な部下であった周恩来まで信用できなくなった毛による周に対する執拗ないじめ、そして身体の衰えのために、後継者を見つけないとするも、自分の妻を先頭とする「四人組」がこれまた信用できず、しかたなく劉少奇とともに失脚させた鄧小平を復活させてみるも、また信用できなくなって鄧に対する批判を始める毛という物語である。

いまや後継者を失った（あるいは自ら捨て去った）毛沢東は、誰を後釜に据えるべきか決めかねていた。どうやらはじめは張春橋を、次に若い王洪文を後継者にしようとしたらしい。その一方、晩年のスターリンと同様、すべての古参幹部を信用できなくなった毛は周恩来にも牙をむいた。毛は1974年に「批林批孔」運動を、翌年には「水滸伝批判」運動を起こし、実に回くどいやり方で周を攻撃した。1973年に復活した鄧小平は、副首相として、すでに膀胱癌におかされて活動がままならなくなっていた周恩来の代わりに秩序回復に奔走した。だが、鄧はうまくやりすぎた。毛沢東（および江青）の眼からみて、彼は思想をおろそかにして、たんに経済的回

復だけを目指しているようにみえたのである。そのため、1975年末には「右からの巻き返しに反撃する」運動が始まり、鄧はまたしても批判に直面することになった。

1976年の政変——そして「短い文革」の終わり

事態は1976年に大きく動いた。1月8日、周恩来が78歳で死去したのである。この出来事のために、鄧小平批判はしばらくお預けとなったものの、周恩来の追悼集会以降、鄧小平は公の場から再び姿を消した。周恩来がいなくなり、鄧小平も失脚してしまった後、毛沢東は誰に党中央の仕事を任せるのか。まったく意外にも、毛は中央政界ではほぼ無名の人物である華国鋒を指名した。これによって最高権力まであとの少しと考えていた「四人組」は深く失望したが、彼らは決して諦めなかった。

江青らは、人々が周恩来の追悼活動に夢中になることで、鄧小平に対する批判が勢いを失うことを恐れた。そのため、「四人組」は亡き総理に対する人々の追悼活動

の広がりを抑え込もうとした。だが、それが人々の怒りを買った。北京では4月4日、天安門広場に周恩来に捧げる花輪をもった人々が数万人も集まった。彼らは広場に立っている人民英雄記念碑の周囲一面に花輪を置き、そして「四人組」への批判、さらには毛沢東への批判さえも含んだ詩や弔辞を張り出した。4月5日未明、北京市当局は200台のトラックを出して、天安門広場の花輪をすべて撤去した。夜が明けると、人々は花輪が持ち去られていることを知って激怒し、数十万人が天安門広場につめかけて「花輪を返せ」と叫び始めた。興奮した群衆の一部は、警察車両をひっくり返し、火を放った。同日夜、軍と公安が出勤し、棍棒などで群衆を蹴散らしたため、広場は血で染められた。これが「四五運動」あるいは「(第一次)天安門事件」と呼ばれる事件である。翌日、政治局は人々が起こした騒ぎを「紛れもない反革命事件」と断定した。

このとき毛沢東は、もはや書類を持ち上げることさえできない著しい衰弱のために、まともな判断ができなくなっていた。そのため、今回の「反革命事件」の黒幕は鄧小平だと訴える江青らの言葉に惑わされた。その結果、

毛は政治局に二つの決議を行うよう提案した。ひとつは、華国鋒を党中央第一副主席、および総理に任命すること。もうひとつは、鄧小平の党内外の職務をすべて取り消すことであった。華国鋒という意外な人物が躍り出てきたとはいえ、鄧小平をお払い箱にできたから、「四人組」は小さく万歳を唱えることができた。だが、彼らが美酒に酔うことができたのはこれが最後であった。

「四人組」とはいかなる人々であったか。彼らは毛沢東の分身ともいいうる人々であった。毛の背中に乗って、文革のスローガンをひととき大声高に叫び、至る所で「これは政治問題だ」と騒いで古参幹部を引きずり降ろそうとする攻撃的な人々であった。彼らは毛の信頼のほかに、何ら政治的資源をもたなかった。したがって、9月9日に毛沢東が死去すると、ほぼ自動的に彼らの政治生命も尽きた。華国鋒と、文化大革命の被害者であるがゆえに江青らに反発する軍の長老たちが、クーデターによって「四人組」を排除することを密かに決定し、周到な準備を行った。10月6日夜8時、政治局常務委員会を開催するとの名目で張春橋、姚文元、王洪文が集められた。彼らが会場に入った際、華国鋒は彼らを隔離審査す

ると告げ連行した。時を同じくして、中南海にいた江青もまた拘束された。極端な文化大革命推進派はこれで政治の舞台から姿を消し、やっと「短い文革」が終わりを告げた。しかし、解き放たれた暴力の余波はまだまだ長く続いたのである。

おわりに——文化大革命の評価

1981年6月に中国共産党は「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」を採択し、そのなかで文化大革命を次のように評価した。この公式見解は今日においても変わらない。

文化大革命はいかなる意味でも革命や社会的進歩とはいえない。中国では社会主義改造が完成し、搾取階級が階級としては消滅した後、社会主義革命の任務はまだ最終的に完成しないとはいえ、革命の内容と方法とは過去のものとまったく異なるべきである。党と国家機構にはたしかに若干の暗い面が存在しており、もちろん憲法や法律に従って解決する必要がある

が、断じて文化大革命の理論や方法とはとるべきではない。文化大革命は指導者が誤って発動し、反革命集団に利用され、党と国家、各民族人民に重大な災難をもたらした内乱であった。

要するに、文革に何もよいところはなかったというのである。もし文革にあえて何らかの意義を見出そうとするなら、それはこの事件が生み出した混乱と破壊があまりにもすさまじいものであったために、毛沢東亡き後、中国がともかく逆の方向を向いて走り出さなければならなかったということであろう。逆の方向とは、資本主義を抱きしめることにはかならなかった。アメリカの歴史家モーリス・メイスナーは、毛沢東時代の終わりまでを総括してこう述べている。「現在の見地からすると、中国の共産主義革命は本質的に、世界でもっとも人口の多い土地にダイナミックな資本主義システムを成長させるための基礎を据えたブルジョア革命だったと結論することが可能であろう」(Meisner, p. 248)。結局のところ、毛の達成したのは、皮肉にも、彼が全生涯をかけ全精力を傾けて否定しようとしたものだったというのである。

今日、社会主義の看板を掲げ続ける中国について、誰もそれを社会主義だとは思っていない。中国共産党の指導者でさえ本心ではそうかもしれない。文化大革命はある意味で社会主義を浄化しようとし、かえってそれを事実上、葬り去ってしまった。今日の中国の政権は、社会主義本来の理念の再確認は棚上げにして、ひたすら富国強兵の道を歩み、もう一度国内で革命が起こることを全力で阻止しようとしている。ほとんど革命しか頭がない政権からほとんど反革命しか頭がない政権へ——中国の変化はいつも極端である。もし毛沢東が大躍進の失敗後に指導者から退き、代わって劉少奇が最高指導者となっていたら、現代中国の歩みはこれほど極端ではなかったかもしれない。社会主義が理念として生き延び、そして資本主義とは異なる社会の夢をみせ続けてくれたなら、今日の世界はいささか違ったものになっていただろう。

参考文献

エドガー・スノー著、松岡洋子訳『革命、そして革命……』朝日新聞社、1972年。

安藤正士・太田勝洪・辻康吾『文化大革命と現代中国』岩波新書、1986年。

劉賓雁著、鈴木博訳『劉賓雁自伝——中国人ジャーナリストの軌跡』みずす書房、1991年。

Maurice Meisner, "China's Communist Revolution: A Half Century Perspective," *Current History*, September 1999.

郭德宏主編『中共党史黨員幹部読本』紅旗出版社、2001年。

敵家祺・高皋著、辻康吾訳『文化大革命十年史』上・下、岩波現代文庫、2002年。

金野純『中国社会と大衆動員——毛沢東時代の政治権力と民衆』御茶の水書房、2008年。

ロデリック・マクファーカー、マイケル・シェーンハルス著、朝倉和子訳『毛沢東最後の革命』上・下、青灯社、2010年。

高文謙著、上村幸治訳『周恩来秘録——党機密文書は語る』上・下、文藝春秋、2007年。

フランク・ディケーター著、中川治子訳『毛沢東の大飢饉——史上最も悲惨で破壊的な人災1958-1962』草思社、2011年。

Daniel Leese, *Mao Cult: Rhetoric and Rituals in China's Cultural Revolution*, Cambridge: Cambridge University Press, 2011.

楊繼繩著、辻康吾編『現代中国資料研究会訳『文化大革命五十年』

岩波書店、2019年。

フランク・ディケーター著、谷川真一監訳、今西康子訳『文化大革命——人民の歴史1962-1976』上・下、人文書院、2020年。

高橋伸夫『中国共産党の歴史』慶應義塾大学出版会、2021年。
アンドリュース・G・ウォルダー著、谷川真一訳『脱線した革命

——毛沢東時代の中国』ミネルヴァ書房、2024年。

高橋伸夫『構想なき革命——毛沢東と文化大革命の起源』慶應義塾大学法学研究会、2025年。

高橋伸夫（たかはし のぶお）

慶應義塾大学名誉教授。1960年生まれ。

慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程修了、博士（法学）。

主要著作：『党と農民——中国農民革命の再検討』（研文出版、2006年）、『中国共産党の歴史』（慶應義塾大学出版会、2021年）、『構想なき革命——毛沢東と文化大革命の起源』（慶應義塾大学法学研究会「発売 慶應義塾大学出版会」、2025年）ほか。

15分で読む 文化大革命終結・毛沢東没後50年 ブックガイド

出版社	ISBN(978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
朝日新聞社		革命、そして革命…	エドガー・スノー 著、松岡洋子訳	品切れ	1972
岩波新書	4004203469	文化大革命と現代中国	安藤正士・太田勝 洪・辻康吾	品切れ	1986
講談社現代新書	4061489714	文化大革命	矢吹晋	860	1989
講談社現代新書	4061490086	私の紅衛兵時代——ある映画 監督の青春	陳凱歌著、刈間文俊 訳	品切れ	1990
みすず書房	4622033509	劉賓雁自伝——中国人ジャー ナリストの軌跡	劉賓雁著、鈴木博訳	品切れ	1991
岩波新書	4004302223	紅衛兵の時代	張承志著、小島晋 治・田所竹彦訳	品切れ	1992
平凡社ライブラリー	4582761276	毛沢東語録	毛沢東著、竹内実訳	1500	1995
岩波現代文庫	上4006000721 中4006000738 下4006000745	文化大革命十年史(上・中・ 下)	厳家祺・高皋著、辻 康吾監訳	品切れ	2002
岩波現代文庫	4006000448	歴史のなかの中国文化大革命	加々美光行	品切れ	2001
日本放送出版協 会	4140807149	消された国家主席 劉少奇	王光美・劉源ほか 著、吉田富夫・萩 野脩二訳	品切れ	2002
慶應義塾大学出 版会	4766409758	中国文化大革命再論	国分良成編著	品切れ	2003
御茶の水書房	4275003010	文化大革命と中国の社会構造 ——公民権の配分と集团的 暴力行為	楊麗君	品切れ	2003
講談社	上4062068468 下4062132015	マオ——誰も知らなかった毛 沢東(上・下)	ユン・チアン、ジョ ン・ハリデイ著／ 土屋京子訳	品切れ	2005
御茶の水書房	4275005908	中国社会と大衆動員——毛沢 東時代の政治権力と民衆	金野純	6800	2008
芸術新聞社	上4875861744 下4875861751	中国 文化大革命の大宣伝 (上・下)	草森紳一	上3500 下3500	2009
白水社	上4560080818 下4560080825	毛沢東——ある人生(上・下)	フィリップ・ショー ト著、山形浩生・ 守岡桜訳	品切れ	2010
青灯社	上4862280459 下4862280466	毛沢東最後の革命(上・下)	ロ德里ック・マク ファーカー、マイ ケル・シェーンハ ルス著／朝倉和子 訳	上3800 下3800	2010
文春文庫	上4167651688 下4167651695	周恩来秘録——党機密文書は 語る(上・下)	高文謙著、上村幸治 訳	品切れ	2010
草思社文庫	4794223753	毛沢東の大飢饉——史上最も 悲惨で破壊的な人災1958 ー1962	フランク・ディケー ター著、中川治子 訳	1600	2019

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
青土社	上4791766857 下4791766864	毛沢東と中国——ある知識人 による中華人民共和国史 (上・下)	錢理群著、阿部幹 雄・鈴木将久・羽 根次郎・丸川哲史 訳	上3900 下3900	2012
文藝春秋	4163748603	毛沢東大躍進秘録	楊繼繩著、伊藤正・ 田口佐紀子・多田 麻美訳	品切れ	2012
岩波現代文庫	上4006003944 下4006003951	墓標なき草原——内モンゴル における文化大革命・虐殺 の記録(上・下)	楊海英	上1420 下1420	2018
岩波書店	4000613071	文化大革命五十年	楊繼繩著、辻康吾 編、現代中国資料 研究会訳	品切れ	2019
人文書院	上4409510827 下4409510834	文化大革命——人民の歴史 1962-1976(上・下)	フランク・ディケー ター著、谷川真一 監訳、今西康子訳	上3000 下3000	2020
名古屋大学出版 会	4815810238	毛沢東論——真理は天から 降ってくる	中兼和津次	3600	2021
慶應義塾大学出 版会	4766427547	中国共産党の歴史	高橋伸夫	3000	2021
ミネルヴァ書房	4623090617	脱線した革命——毛沢東時代 の中国	アンドリュース・G・ ウォルター著、谷 川真一訳	5500	2024
東京大学出版会	上4130261791 下4130261807	中ソ関係史(上)1917-1960 (下)1960-1991	沈志華編、熊倉潤訳	上5400 下5400	2024
慶應義塾大学法 学研究会	4766430219	構想なき革命——毛沢東と文 化大革命の起源	高橋伸夫	8500	2025

人文書と人文会とともに歩んだ二十年

喜田 浩資（丸善ジュンク堂書店 営業推進部）

早いもので、この春で当時のジュンク堂書店に入社してまる二十年が経った。二〇〇五年に入社し池袋本店配属となり、新潟店、札幌店の順にジュンク堂書店の地方進出に合わせて異動、東京に戻って二〇一一年に丸善丸の内本店に転出し（この間に丸善とジュンク堂書店が経営統合した）、この間かわらず人文書担当であった。その後二〇一六年に本部勤務となり直接人文書に触れることは少なくなったが、人文書のジャンルアドバイザーとして新規店の店づくりや研修に携わり、かれこれ二十年以上人文書担当として過ごすことになった。

人文書と長く付き合う中でいつも思うのは、一口に人文書と言っても、その範囲があまりに多岐にわたることだ。書店で人文書とは通常、「思想」「宗教」「歴史」「心理」「教育」の分類をさすが、広義な意味合いでは「芸術」「文芸」も人文書と言っている。かつて人文書担当の大先輩が「人の営みを記録したものが歴史で、人の頭に浮かんだものを散文につづったものが思想であり随筆（エッセイ）、それが物語であれば小説やし、曲になれば音楽、絵画になれば芸術、みな人文や！」と言ったことがある。そういう意味で言えば、言語学が人文の一分野である以上、語学書も「実用的な」人文書だし、児童書・絵本も「子ども向けの」人文書、極論を言えばコミックも

人文書かもしれない。それだけ人文書は多様であり、書店員にとって分類しづらいジャンルと言える。

新刊が入荷した際の最初の仕事である、「どの棚に置くか、どの本の横に差すか」の分類作業の際に困る本が多いのが人文書の特徴だ。そもそも書店のジャンル区分の「芸術」「文芸」との境界線が曖昧であるために、うまく人文書が手元に回ってくるとも限らない。段ボールを開梱し新刊を仕分けするという作業は、たいてい店のスタッフ皆で手分けして行うのだが、ここで別のジャンルに仕分けられてしまうことがよくある。無事手元に人文書の新刊が届いたとしても、その先、「どの棚に置くか」の分類作業が文字通り格闘のようであり、また面白いところでもある。分類が悩ましい本に対して「ここだ！」という棚が見つかった時ほど気持ちの良いことはないが、その後何年かして他の人文書担当との雑談の中や棚整理の過程で、同じ著者の別の新刊が出た際などに、「あそこではなかった！ここだ！」とより適切な棚が見つかることもあり、なかなか正解は見つからない。研修の際に「人文書を分類するのにタイトルで判断してはダメだよ」とよく言う。著者の専門や、著者の過去の著作を参照するのが正解に近づく一番の方法で、帯の宣伝文句なども読者層がわかって意外とあてになることが多い。よく例にするのが「村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』を理工書の鳥類の棚に置かないでしょう？ 村上春樹の棚に置くでしょう？」というもので、タイトルを見てしまうとミスリードされるため、どの棚に置くとお客様が見つけやすいか、読者層を考えて棚に置くことが重要だということである。

人文書は息が長いのも特徴で、私自身が入社した二〇〇五年前後に刊行された書籍の中で、今なお定番書として息長く販売しているものが多い。それらを年順に並べると、

入社以前

『夜と霧 新版』みすず書房 二〇〇二年

『こころが晴れるノート』創元社 二〇〇三年

『生きがいについて 神谷美恵子コレクション』みすず書房 二〇〇四年

入社後

『神々の沈黙』紀伊國屋書店 二〇〇五年（いまだにどの棚が正解かわからない…）

『17歳のための世界と日本の見方』春秋社 二〇〇六年

『影響力の武器 第二版』誠信書房 二〇〇七年（その後現在までに二度改訂された）

『傾聴術』誠信書房 二〇〇八年

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社 二〇〇九年

というように、刊行後二十年経っているのにもかかわらず、古びることもなくいまだにロングセラーとして残っていることに驚かされる。

それらロングセラーの人文書を刊行する出版社が多く属しているのが人文会だ。多様なジャンルをもつ人文書と同様に、哲学・思想を得意とする出版社、歴史を得意とする出版社、人文書だけでなく法経書にも強い出版社など、会員社は多岐にわたる。各社が出版する本も多種多様で、結果人文担当が本の分類に困るわけである。そうした扱いの難しい人文書の普及と、どのように販売するかについて、人文会は全国の人文書を扱う書店や書店員に対して研修を行っている。それら、会員各社の営業担当者が定期的に各地の書店を巡回し陳列・販売方法を指南している。それら人文書の販売に詳しい人文会の皆さんのノウハウの集積が『人文書販売の手引き』だ。初版が

二〇一一年、第二版が二〇一五年に刊行され、二〇二三年の第三版の改訂の際には私自身が大きく関わった。棚チャートと基本書リストを作成したが、これまでの私自身の経験を形にすることができた。ジュンク堂書店に入社当初の人文書のこととわからない私に、販売の手ほどきをしてくれた人文会に恩返しができたようであれしく思う。

人文会との関わりで思い出されるのが、二〇〇八年に行われた「人文会四〇周年記念合同研修会」だ。「人文書の可能性を探る」というテーマで、全国各地の書店の人文書担当者が一〇〇名ほど集まりディスカッションが行われた。ずいぶん前のことであり、お酒を酌み交わしながら口角泡を飛ばしたなあ、くらしい記憶しかなく、あらためて人文会のホームページにアップロードされている『人文会ニュース』一〇五号にまとめられている研修会の報告を読み返してみた。「人文書が売れない売れない」と言われていたのは当時からで、今も変わらない。その中で人文書をどのように売っていくか、各書店の取り組みなどが議論され、その展望や可能性が探られた。「教養主義の没落」というのも語られていて、今はさらに状況は悪いと思うが、当時の議論の根底にあるのが現在と変わらないことが興味深い。二〇二二年二月には丸善ジュンク堂書店の人文担当者で人文会営業担当者でオンライン上での懇談会を実施した。人文会の恒例となっている各地への訪問ができなくなった、という当時の社会情勢もあり、オンライン形式となった。社内的にも同じ人文書担当が集まる機会もほとんどないため、各地の人文書担当が意見交換や悩み相談をすることでモチベーションアップにつながる良い機会になったと思う。

二十年変わらず人文書担当でありつづけてきて、二十年前当時の状況、その当時に社内外の先輩方から聞いたさらにその前時代の状況、そうした過去から続いてきた人文書販売の歴史を次の



著者近影

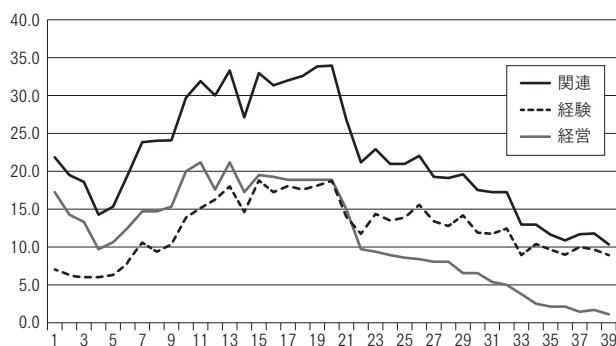
世代に繋げるのも一つの仕事かな、と思いながら、『人文書販売の手引き』の作成や懇談会の実施に取り組んだ。書店の在り方も変わっていく中で、今後より厳しい状況が続くと思うが、いつも自分の心は人文書のそばにあるつもりでいたい。

近代日本メディア議員列伝——「メディア議員研究」の射程

佐藤 卓己（上智大学文学部新聞学科教授、京都大学名誉教授）

二〇二六年四月刊行の河崎吉紀『近代日本メディア議員人名辞典・付総索引』をもって、「近代日本メディア議員列伝」全一五巻が完結した。メディア議員とは「メディア経験をもつ代議士」あるいは「議席をもったジャーナリスト」である。新聞社、雑誌社、放送局などメディアでの経験を足場に政治家となったメディア議員の計量分析および集团的考察については、河崎吉紀との共編著『近代日本のメディア議員——政治のメディア化』の歴史社会学』（創元社・二〇一八年）でまとめている。その副題にもある「政治のメディア化」とは、政治が価値や理念の実現ではなく、効果や影響力の最大化を目指して展開されていく状況を意味する。その政治状況を体現したのが「メディア議員」である。

図①は一八九〇（明治二三）年の第一回衆議院総選挙から一九九〇（平成二）年の第三九回総選挙まで一〇〇年間の「メディア（関連）議員」九八四名が衆議院で占めた比率を示したものである。意外と感じる人も多いだろうが、一九二四年の第一五回総選挙から一九三七年の第二〇回総選挙まで、戦前の衆議院で「メディア（関連）議員」は全議席の三割を超えていた。特に注目すべきは、「メディア（関連）議員」がピークを迎えたのが一九三七年四月三〇日の第二〇回総選挙であることだ。このとき衆議院で彼らが占める割合は空前絶後の三四・一％に達していた。日中戦争が勃発する約二カ月前である。つまり、戦前の国会は「世論を指導する言論人」が三分の一以上の議席を占めていたことになる。



図① 「メディア関連議員の衆議院議席占有率」『近代日本のメディア議員』76頁

続いて戦時体制下の言論統制に筆を進めるなら、「にもかかわらず」と文章を続けるのが普通だろう。議会では言論人が多数を占めていたにもかかわらず、なぜ戦争を止めることはできなかったのか、と。

だが、本当にそう問うべきなのだろうか。むしろ、逆ではないのか。同書では敢えて「それにもかかわらず」とするのではなく、「それゆえに」と考えてみた。メディア議員が議会に多くいたために、戦争支持の大衆世論に流されて、戦争を止めることなど到底できなかったのではないかと。

そう考えると、「政治のメディア化」Mediaization of politics という今日の問題にも直結する。「政治のメディア化」とは、メディアの論理（効果や影響力の最大化）がメディアの枠を超えて、政治の論理（価値や理念の実現）を上書きし、政治の組織や活動にまで影響力を強めていくプロセスである。

重要なことは、こうした「政治のメディア化」を象徴する「メディア議員」の研究が日本ではほとんど行われてこなかったことである。政治学の視点では、理念よりも人気を重視する政治はポピュリズム（大衆迎合主義）で

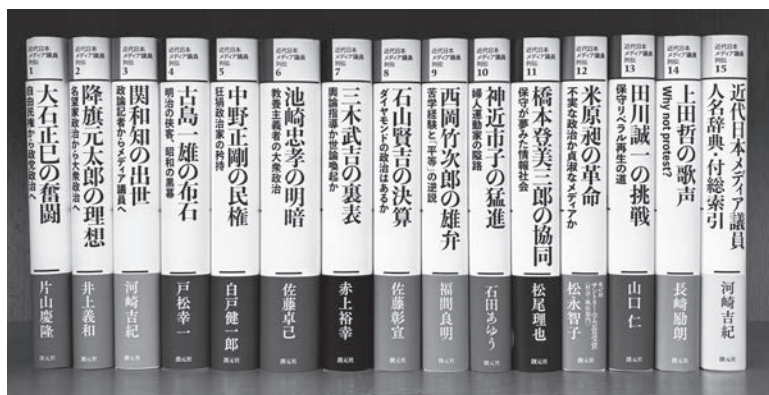
あり、それを体現する議員は理想的な政治家とは言えない。またジャーナリズム研究の視点からは、彼らの扱いがもっと難しくなる。というのも、メディアに「権力監視」や「体制批判」を期待するなら、メディアと政治（権力・体制）を股にかけるメディア議員はグレーゾーンの存在だからである。しかし、私たちがいま目にする政治家はSNSで日々刻々と情報を発信しており、その多くは主張（理念）よりもイメージ（影響力）を重視している。そうしたウェブ体験を経た議員なら、いまや多かれ少なかれ全員が「メディア議員」なのではないか。

こうした「メディア議員」の中には『大東日報』主筆の原敬、『郵便報知新聞』記者の犬養毅、『東京日日新聞』社長の加藤高明、『東洋経済新報』社長の石橋湛山など首相経験者も少なくない。この列伝シリーズでは、そうした成功した大物（すでに多数の評伝があるメディア議員）よりも、まず忘却されつつある中堅（ある意味で平均的なメディア議員）に焦点を絞った。成功や栄光よりも失敗や挫折の中にこそ、今日の私たちが戒めとすべき歴史の教訓もあると考えたからである。

こうして選んだ典型的「メディア議員」を教育・メ

ディア・政治からの三点測量して考察するシリーズが「近代日本メディア議員列伝」全一五巻なのである（図②）。メディア出身議員がどのような教育を受けてメディアに関心を持つようになり、そのジャーナリスト経験がその政治活動とどう結びついたのか、その政治化プロセスを新聞や雑誌の記事のほか、日記、回想、評伝を含む史料から明らかにすることを目的とした。

二〇二三年六月の第一回配本である拙著『池崎忠孝の明暗―教養主義者の大衆政治―』から数えて二年一〇カ月、この全巻の編集を担当していただいた創元社企画本部の山崎孝泰さんにまずお礼を申し上げるべきだろう。こうした重厚な研究書を二〜三カ月に一冊刊行する編集作業はおそらく異例であり、大変なご苦勞をおかけしたはずである。まず、心より感謝を申し上げたい。「編集者が語る」という本来の趣旨からすれば、本稿も山崎孝泰さんにお願ひすべきものかもしれない。とはいえ、各巻のカバーのそでに「佐藤卓己氏単独編集による完全書き下ろしの全15冊シリーズ」と謳われている。私は科研費基盤（B）「メディア出身議員」調査による新しいメディア政治史の構想」（二〇一五―二〇一七年度）および同「近代日



図② 「近代日本メディア議員列伝」全15巻

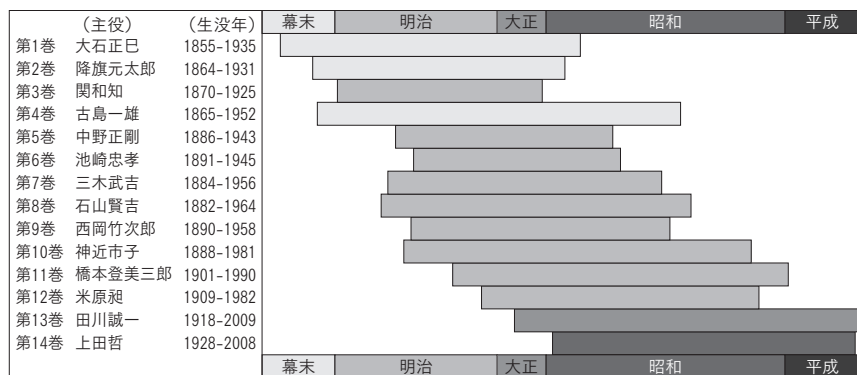
本の政治エリート輩出における「メディア経験」の総合的研究」(二〇二〇―二〇三二年度)の代表者として、研究分担者を選び、扱う政治家を選ぶ会議を開き、シリーズの統一的な記述スタイルを提案したに過ぎない。発売順に執筆者と各巻を並べると次のようになる。

- ・第六巻 佐藤卓己『池崎忠孝の明暗―教養主義者の大衆政治』二〇二三年六月一三日
- ・第二巻 井上義和『降旗元太郎の理想―名望家政治から大衆政治へ』二〇二三年十一月一四日
- ・第五巻 白戸健一郎『中野正剛の民権―狂狷政治家の矜持』二〇二三年十二月一三日
- ・第七巻 赤上裕幸『三木武吉の裏表―輿論指導か世論喚起か』二〇二四年一月一七日
- ・第三巻 河崎吉紀『関和知の出世―政論記者からメディア議員へ』二〇二四年三月一日
- ・第一巻 松尾理也『橋本登美三郎の協同―保守が夢見た情報社会』二〇二四年五月一五日
- ・第九巻 福岡良明『西岡竹次郎の雄弁―苦学経験と「平等」の逆説』二〇二四年七月九日



図③ 左より第1回配本、第10回配本、第15回配本

- ・第一三巻 山口仁『田川誠一の挑戦―保守リベラル再生の道』二〇二四年九月一〇日
 - ・第八巻 佐藤彰宣『石山賢吉の決算―ダイヤモンドの政治はあるか』二〇二四年一月八日
 - ・第一二巻 松永智子『米原昶の革命―不実な政治か貞淑なメディアか』二〇二五年二月一七日
 - ・第一〇巻 石田あゆり『神近市子の猛進―婦人運動家の隘路』二〇二五年三月五日
 - ・第四巻 戸松幸一『古島一雄の布石―明治の俠客、昭和の黒幕』二〇二五年八月一九日
 - ・第一四巻 長崎励朗『上田哲の歌声―Why not protest?』二〇二五年九月一六日
 - ・第一巻 片山慶隆『大石正巳の奮闘―自由民権から政党政治へ』二〇二五年二月一七日
 - ・第一五巻 河崎吉紀『近代日本メディア議員人名辞典・付総索引』二〇二六年四月一四日
- メイン・タイトルは「対象とするメディア政治家」と「二文字のキーワード」、サブタイトルで主題を示した統一スタイルは、たしかに私が提案したものである。それ



図④ 「近代日本メディア議員列伝」各巻主役生没年

は各巻が列伝シリーズの枠を保ちながらも、単独の評伝研究としても読まれることを期待してのことである。実際、第一二巻の松永智子『米原昶の革命―不実な政治か貞淑なメディアか』は、個別に第四七回サントリー学芸賞を受賞している。

巻号は取り上げた「メディア議員」の生年順だが、それを生没年でグラフ化(図④)すると全体で瓦版の幕末からSNSの平成まで日本のメディア政治史を通観できることがわかる。列伝シリーズは司馬遷『史記』の編年体を踏襲しているようでもあり、また『自由新聞』社主・大石正巳に始まり「NHKの闇将軍」上田哲で終わる配列は基軸メディア(明治の新聞から昭和のテレビ)の変化を意識して配置したメディア通史とも言える。最終巻(第一五巻)に河崎吉紀『近代日本メディア議員人名辞典・付総索引』を置いた理由は、シリーズ全体が一つの「近代日本メディア史」として読まれることを想定している。

最初の科研費基盤研究(B)の成果が冒頭で引用した『近代日本のメディア議員』(二〇一八年)なので、この「近代日本メディア議員列伝」は一〇年間にわたる共同研究の集大成だったことになる。その代表者こそ私だが、

データ分析を取りまとめたリーダー役は河崎吉紀・同志社大学教授である。このプロジェクトを立ち上げる際、博士論文を『制度化される新聞記者―その学歴・採用・資格』（柏書房・二〇〇六年）として上梓した河崎さんと相談しつつ科研費の申請書を書き上げた。河崎さんの博論刊行をお願いしたのが、当時は柏書房編集部長だった山口泰生さんであり、その編集担当が山崎孝泰さんだった。その後、お二人とも創元社に移られたわけだが、山口さんには「メディア議員」共同研究の立ち上げから討議にも参加していただいていた。河崎さんの視点に立てば、シリーズ最終巻『近代日本メディア議員人名辞典・付総索引』は、『制度化される新聞記者』から二〇年間の研究を集大成する一冊と言えるのだろう。

なお、このシリーズが平均して二カ月半に一冊のペースで刊行できた理由は、執筆者の多くが同志社大学や京都大学で私のメディア史ゼミに所属した経験のある研究者であり、私の定年退職（本来であれば二〇二六年三月）に間に合わせたいという配慮も働いたためだろう（もっとも私は二年前に京都大学を早期退職しているので、残念ながら退職記念プロジェクトとはならなかった）。出版不況の今日では退

職記念論集も珍しくなっているが、私のように退職記念シリーズをゼミナリストに書いてもらった教員は稀有だろう。あらためて、担当編集者と執筆者全員に感謝の言葉を送りたい。ありがとうございました。

広報委員会

委員長 乙子 智

今期の広報委員会は、大月書店の金田壮史さんを新たなメンバーに迎えて2年ぶりに4人体制に戻ります。この体制にて、例年に引き続き『人文会ニュース』の発行とウェブサイトの運営という二本柱を中心に委員会活動を行うとともに、2年後に控えた人文会60周年に向けた企画の準備も進めてまいります。

『人文会ニュース』は年3回(8月、12月、4月)のスケジュールでの発行を目指します。人文会の活動を広く知らせるという役割を基本とし、書店や図書館の人文書担当の方に人文書の魅力をより深くお伝えするとともに、日常の業務に役に立つようなコンテンツを提供していきたいと考えています。

ウェブサイト (<https://jinbunkai.com>) は、人文会と会員各社の情報提供の場として引き続き内容の充実を図っていきます。また、ウェブサイトと連動したX [旧Twitter] (@jinbunkai) での投稿配信も行ってまいります。小会の活動や会員各社のおすすめの書籍がよりタイムリーに発信されていますのでご覧いただければ幸いです。

今期も紙媒体とウェブ媒体、それぞれの特性を活かし、かつ補完し合いながら、人文会と人文書の普及、発展を目指しますので、何卒よろしくお願いいたします。

委員長	乙子 智(慶應義塾大学出版会)	金田壮史(大月書店)
副委員長	本橋弘行(ミネルヴァ書房)	小林圭司(白水社)

委員会活動方針

販売・研修委員会

委員長 吉岡 聡

今期より新たに始動した販売・研修委員会は、総勢7人一丸となって各施策に取り組んで参ります。

小会各社の新刊・話題書・ロングセラーの定期的な情報発信用ツールのうち、FAX通信(月1回)は「人文会 今月のイチ推し」と改称し、拡材充実を図り、従来の欠本補充だけでなく、フェア展開のご提案も進めてゆく方針です。なお、同じく月1回の実施で、長らくご活用いただいている「新刊案内バック」は熟慮の末、年度途中で一旦の休止を計画しています。

全国有力書店でのブックフェア開催と外商施策は、今後も積極的に実施して参ります。特に紀伊國屋書店様との店売常設棚施策「人文書 今月のイチ推し」フェアは、今期8月よりグループ会社である旭屋書店様、紀伊國屋書籍販売様を含めた全国21店舗が新たに合流し、開始から2年を経て計44店舗で展開される大型施策へと更なる成長を果たしております。

特約店グループ訪問は、試験的に2班ずつに開催時期を分けて前後半で実施し、全国の書店・大学生協・取次・公共図書館への訪問を計画しています。加えて会員社内での情報共有・現状把握・課題解決を目的とした調査・研修活動は、随時タイムリーなテーマを募り、必要に応じて外部からの講師を招きながら、期内2回以上の開催を模索します。

また、新たに発足した「60周年企画グループ」を中心に、2年後に控えた創立60周年の準備を進めつつ、今期も人文書の普及・販売・棚構築と会員各社への有益な情報提供のために尽力して参る所存です。1年間よろしくお願い申し上げます。

委員長	吉岡 聡(春秋社)	段塚省吾(紀伊國屋書店)
副委員長	森 卓巳(青土社)	河内秀憲(筑摩書房)
副委員長	郡司恵太(誠信書房)	足立 佑(東京大学出版会)
		荻原弘和(日本評論社)

場所：慶應義塾大学出版会会議室

代理出席 筑摩書房

1. 代表幹事より
2. グループ訪問について
3. 各委員会活動報告
4. その他

●紀伊國屋書店BookWebPro基本書・ロングセラー販促用特設ページ設置&プロモーション
メール配信

「いま定番となる一冊を一人文会自信の300冊」

2025年11月～2026年3月 1,453冊 5,047,800円

☆4月例会

期日：2026/4/17 14:00～1:00

場所：かやの木会館

1. 代表幹事より
2. 第59回総会案内
3. グループ訪問について
4. 委員会報告
5. その他
6. 株式会社紀伊國屋書店様来会 16:00～17:40

取締役副社長 大野繁治様

取締役首都圏地区店売第一部長兼新宿本店長 星真一様

店売総本部販売促進本部長 葛城伸一様

店売総本部販売促進本部付部長 松井清正様

店売総本部販売促進本部販売促進部長 石井温己様

店売総本部販売促進本部販売促進部付部長 後藤崇様

○人文会ニュース152号刊行

2026年4月発行（52頁、4700部）

15分で読む：串田純一（ハイデガーの途切れた時間と存在を引き継ぐ時間）

書店現場から：飯田光平（バリューブックス）

図書館レポート：北澤梨絵子（塩尻市立図書館）

●「[人文会おすすめ] 高校生向けブックガイド2026」発行 担当：段塚（紀伊國屋書店）
15,000部 4月発行

書店現場から：長崎健一（長崎書店）
図書館レポート：嘉賀収司（境港市民図書館）
2025年グループ訪問報告

☆1月例会

期日：2026/1/16 15:00～17:00

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他 情報交換

- 紀伊國屋書店新宿本店「心理学専門書マスト100フェア」担当：販売・企画委員会 郡司（誠信書房）

期日：2025/11/25～2026/1/19 221冊・487,800円

- 練馬区立図書館 現物選書会 担当：片桐（みすず書房）

期日：2026/1/29 選書実績 245冊・1,009,880円

☆2月例会

期日：2026/2/20 14:00～15:30

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他

○くまざわ書店書店研修会

「書店のリアル」から学ぶ

期日：2026/2/20 15:30～17:30

会場：筑摩書房会議室

参加者：株式会社くまざわ書店

取締役 中島恭一様

本部 営業推進部 係長 飯田正人様

セレオ甲府店 店長 長谷川和様

ACADEMIAイーアスつくば店 副店長 東條充様

ACADEMIA橋本店 柳田珠希様

会員社 17名

☆3月例会

期日：2026/3/12 15:00～17:00

4. その他

5. 株式会社丸善ジュンク堂書店様来会 16:30～17:20

営業本部 東日本営業部

サポートマネージャー 東日本ジャンルアドバイザー統括 人文書ジャンルアドバイザー東西統括チーフ 喜田浩資様

ジュンク堂書店吉祥寺店 副店長 人文書担当 梅田昌信様

●金高堂書店 人文書フェア 担当：販売・企画委員会 荻原（日本評論社）

期日：2025/9/16～2025/11/9

本店 511冊・1,005,245円

朝倉ブックセンター 312冊・548,714円

期日：2025/8～2025/12

外商部 158冊・384,000円

●宮城県富谷市図書館蔵書提案 担当：片桐（みすず書房）

期日：2025年10月 選書実績：1,383冊・本体3,587,902円

☆11月例会

期日：2025/11/21 15:00～17:00

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店施策
3. 各委員会活動報告
4. その他

担当者変更 白水社

☆12月例会

期日：2025/12/19 15:00～17:10

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店研修会
3. 各委員会活動報告
4. その他 情報交換

担当者変更 大月書店

○人文会ニュース151号刊行

2025年12月発行（52頁、4700部）

15分で読む：上村剛（アメリカ独立250年）

○人文会ニュース150号(記念号)刊行

2025年9月発行(40頁、4700部)

代表幹事挨拶

人文会の活動を振り返って：田崎洋幸

人文書を好きな人が増えたら、世界は今よりもよくなると思いませんか：中村隆之

「人文会ニュース」150号記念号によせて

何でも置ける人文書棚をいかに作るか：東二町順也

人文書を売ること：大屋恵子

人文会とのご縁と、人文会ニュースへの期待：児玉真也

効率と非効率の狭間で―知識と智慧について：西村仁志

人文会ニュース目次再録(121～150号)

総会報告、活動報告、委員会活動方針

☆9月例会

期日：2025/9/19 14:00～16:30

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他
4. 楽天グループ株式会社様来会 16:30～17:15
書籍事業部 MD・購買統括課 MD推進グループ
ヴァイスマネージャー 金山龍栄様
神田理華様

●三省堂書店名古屋本店「人文書を彩る書物たち」担当：販売・企画委員会 郡司(誠信書房)

期日：2025/8/23～9/30 1,108冊・1,989,270円

●三省堂書店名古屋本店「人文会高校生向けブックガイドフェア」担当：販売・企画委員会 吉岡(春秋社)

期日：2025/9/1～10/8 44冊・96,200円

☆10月例会

期日：2025/10/17 15:20～16:30

場所：筑摩書房会議室

1. 株式会社トーハン様来会 15:00～15:20
書籍部 調整第三グループ アシスタントマネージャー 住田直也様
2. 代表幹事より
3. 各委員会活動報告

- ・7/2～4 山梨・長野グループ：◎慶應義塾大学出版会(乙子)・大月書店(佐藤)・東京大学出版会(足立)・みすず書房(片桐)
 - ・7/30～8/1 広島・島根・鳥取グループ：◎吉川弘文館(片山)・春秋社(吉岡)・創元社(水口)・白水社(中沢)
- (◎班長)

○調査・研修委員会主催研修会

「トーハン桶川センター 見学会」

期日：2025/7/11 13:00～17:00

参加者：会員社 14名

☆7月例会

期日：2025/7/18 15:00～17:30

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店施策
3. 各委員会報告
4. グループ訪問報告(九州・東海・甲信)
5. その他

- 岡山大学ブックストア「心理学専門書マスト100 2025」担当：販売・企画委員会 郡司(誠信書房)

期日：2025/6/9～7/31 15冊・28,900円

- 三省堂書店そごう千葉店「戦後80年・昭和100年フェア」担当：販売・企画委員会 佐藤(大月書店)

期日：2025/7/14～9/2 95冊・186,120円

- 平安堂長野店外商センター図書巡回 担当：販売・企画委員会 佐藤(大月書店)

期日：2025/7/28～ 22冊・47,300円

- 紀伊國屋書店横浜店「書物の海へ・横浜人文書フェア」担当：販売・企画委員会 郡司(誠信書房)

期日：2025/8/14～9/14 91冊・150,810円

- ユーチャンフォーチェーン道内6店舗同時フェア「知の森を歩く 人文書フェア」担当：販売・企画委員会 吉岡(春秋社)

期間：2025/4/1～9/30 全店合計実績：販売冊数1,324冊／販売金額1,740,200円

新川通り店：222冊・386,200円、ミュンヘン大橋店：244冊・453,650円、美しが丘店：147冊・257,750円

旭川店：159冊・275,800円、北見店：113冊・194,250円、釧路店：98冊・172,550円

* 選出された幹事(代表幹事、書記、会計と3委員長)により各員の希望も考慮し、委員会の構成メンバーを選考。

以下の人事を決定。

9 2025年度の役員および各委員会メンバーの発表

- ・代表幹事 片桐 幹夫(みずず書房)
- ・会計幹事 片山 伸治(吉川弘文館)
- ・書記幹事 水口 大介(創元社)
- ・販売・企画委員会 ◎吉岡 聡(春秋社) ○段塚 省吾(紀伊國屋書店)
佐藤 信治(大月書店)・郡司 恵太(誠信書房)・
足立 佑(東京大学出版会)・荻原 弘和(日本評論社)
- ・調査・研修委員会 ◎森 卓巳(青土社) ○東原 亮佑(勁草書房)
河内 秀憲(筑摩書房)
- ・広報委員会 ◎乙子 智(慶應義塾大学出版会) ○本橋 弘行(ミネルヴァ
書房)
中沢 佑次(白水社)

《◎委員長(幹事)○副委員長》

10 三役と各委員長挨拶

11 事務連絡

17:00 終了

●三省堂書店「本の街 神田神保町発! 人文書 自信のオススメ」⇒継続中

●紀伊國屋書店BookWebPro施策⇒継続中

●紀伊國屋書店「人文書 今月のイチ推し」⇒23店舗継続中

☆6月例会

期日: 2025/6/20 15:00 ~ 17:20

場所: 筑摩書房会議室

欠席 誠信書房

1. 代表幹事より
2. 紀伊國屋書店施策
3. 各委員会報告
4. その他

○特約店グループ訪問

- ・6/25 ~ 27 福岡・熊本グループ: ◎勁草書房(東原)・青土社(森)・ミネルヴァ書房(本橋)
- ・7/2 ~ 4 愛知・静岡グループ: ◎誠信書房(郡司)・紀伊國屋書店(段塚)・筑摩書房(河内)・日本評論社(荻原)

2025年度(2025.5～2026.4)人文会活動報告(全般)

書記 水口大介

☆第58回(2024年度)人文会総会

期日：2025/5/16 14:00～

場所：筑摩書房会議室

出席者：正担当者18名

14:00 開始

総会の開催

1 代表幹事挨拶

2 総会議長選出

* 総会議長は慣例に従い前年度の書記幹事(水口)が務める。

3 2024年度活動報告

ア) 会活動全般 (書記：水口)

イ) 会計報告 (会計：片山)

4 2024年度各委員会活動報告

ア) 販売・企画委員会 (委員長：吉岡)

イ) 調査・研修委員会 (委員長：森)

ウ) 広報委員会 (委員長：岩野)

5 会則の改廃

* 今回は提案なし

6 休会・復会・退会・入会について

復会の報告：日本評論社

休会の報告：晶文社・平凡社・法政大学出版社

7 担当者変更の報告

白水社

8 役員の改選及び各委員会構成について

ア) 代表幹事選出

議長より片桐氏を推挙。全会員賛同にて片桐代表幹事留任を決定。

イ) 選考委員選出

出席者による2名連記投票で票数の多い上位5名を選出。

ウ) 書記幹事、会計幹事および各委員会委員長を選出 【別室】

選出された選考委員5名と代表幹事の計6名にて協議。以下の人事を決定。

会計(片山)／書記(水口)／販売・企画(吉岡)／調査・研修(森)／広報(乙子)

エ) 各委員会の構成メンバーの選任 【別室】

2025年度(第59回)人文会年次総会報告

書記幹事 水口大介

2025年度(第59回)の人文会年次総会は、2026年5月15日、「筑摩書房・会議室」において全会員社出席のもとに開催されました。

議事は、2025年度(2025年5月1日～2026年4月30日)の活動報告(全般)から始まり、会計報告、次いで「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告および質疑応答、承認と続き、新年度に向けての役員改選および各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、昨年度に引き続き、全会一致で片桐幹夫氏(みすず書房)が選出されました。

会計幹事は片山伸治氏(吉川弘文館)、書記幹事は水口大介(創元社)が選出(いずれも留任)されました。委員会構成は従来の「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制から、2026年度については「販売・研修」「広報」の二委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

各委員長(幹事)は、吉岡聡氏(春秋社)が新設された販売・研修委員長(新任)、乙子智氏(慶應義塾大学出版会)が広報委員長(留任)に選出されました。

また、勁草書房・晶文社・平凡社・法政大学出版局の休会が承認されました。なお、各委員会の構成は、巻末の「人文会名簿」をご参照ください。

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷2-20-7 みすず書房内

2026年8月現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	金田壮史	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	03-3813-4651	03-3813-4656
紀伊國屋書店	段塚省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	03-6910-0519	03-6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子 智	108-0073	港区三田2-17-31	03-3451-6926	03-3451-3124
勁草書房(休会中)		112-0005	文京区水道2-1-1	03-3814-6861	03-3814-6854
春 秋 社	吉岡 聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	03-3255-9611	03-3253-1384
晶 文 社 (休会中)		101-0051	千代田区神田神保町1-11	03-3518-4940	03-3518-4944
誠 信 書 房	郡司恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	03-3946-5666	03-3945-8880
青 土 社	森 卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	03-3294-7829	03-3294-8035
創 元 社	水口大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	06-6231-9010	06-6233-3111
筑 摩 書 房	河内秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	03-5687-2680	03-5687-2685
東京大学出版会	足立 佑	153-0041	目黒区駒場4-5-29	03-6407-1069	03-6407-1991
日 本 評 論 社	荻原弘和	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	03-3987-8621	03-3987-8590
白 水 社	小林圭司	101-0052	千代田区神田小川町3-24	03-3291-7811	03-3291-8448
平 凡 社 (休会中)		101-0051	千代田区神田神保町3-29	03-3230-6572	03-3230-6587
法政大学出版局(休会中)		102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	03-5214-5540	03-5214-5542
み す ず 書 房	片桐幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	03-3814-0131	03-3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	03-3525-8460	03-3525-8461
吉 川 弘 文 館	片山伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	03-3813-9151	03-3812-3544

代表幹事 片桐幹夫
 会計幹事 片山伸治
 書記幹事 水口大介

《◎委員長(幹事) ○副委員長》

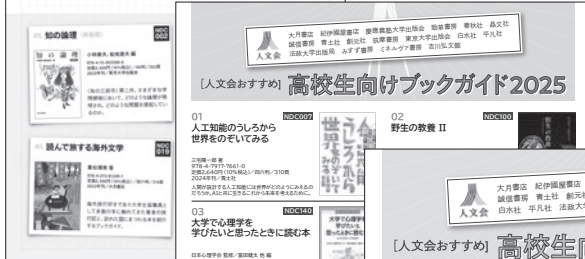
販売・研修委員会 ◎吉岡 聡 ○森 卓巳 ○郡司恵太
 段塚省吾・河内秀憲・足立 佑・荻原弘和

広報委員会 ◎乙子 智 ○本橋弘行 金田壮史・小林圭司

人文会ホームページ <https://www.jinbunkai.com/>
 (各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ)

「高校生向けブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでもらいたい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生向けブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。



『人文会ニュース』バックナンバー公開のご案内

1973年6月に第1号を発行した『人文会ニュース』も既に150号を超え、読者の方からは過去の記事を読みたいという希望が寄せられることも多くなりました。

また会員社の移り変わりもあり、人文会として保存をしておく必要性も高まり、バックナンバーのデジタル化に取り組み、一般に向けて公開しておりますので、是非ご利用いただければ幸いです。人文会ウェブサイト、または下記のURLから閲覧ください。



1~117号

URL <https://jinbunkai.com/contents/backnumber/>



118~152号

URL <https://jinbunkai.com/contents/>

中世日本宗教史 (全六巻)

莫輪顕量／菊地天樹／増記隆介／高橋悠介 編

第二巻 王朝文化の胎動

撰関期〜鳥羽院政期

撰関期から中世が始まるとみて
鳥羽院政期までの東大寺や浄土
思想、仏像や神像、陰陽道など
について取り上げる。 3520円

◇順次刊行・分売可

◎内容見本呈
くわしくは
↓



春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6 (税込)
☎ 03-3255-9611 FAX 03-3253-1384

犬は生まれながらにして マーク・ローランズ

哲学者である

犬は生きる喜びを知っている。犬の生きざまから、人間の迷いや生の意味を照らし返す。待望の哲学エッセイ。

2640円

法にとって家族とは何か 木村草太

「伝統的家族観」はどこから生まれたのか。家制度、明治民法、憲法24条、戦後民法改正をたどり、日本の家族法を読み解く。 2420円

初期大江健三郎論 北山敏秀

1957-1972 全著作精読

大江健三郎の初期テクニクを精読し、「戦後民主主義の作家」とい
う像を問い直す。俊英による新たな大江健三郎論。

5280円

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829
<http://www.seidosha.co.jp/> (価格税込)

人文書販売の手引き 第3版



- 哲学・思想
- 心理
- 宗教
- 歴史
- 社会学



https://jinbunkai.com/jb_contents/tebiki-3rd/

接続された脳とヘーゲル

シンギュラリティにおける主体性の行方
スラヴォイ・ジジエック 著 池松辰男 他訳
シンギュラリティの到来によってもたらされる
ポスト・ヒューマン時代の主体性を、ヘー
ゲルとラカンを通して問う意欲作。 3520円

ある島嶼コミュニティにおける コミュニケーション行動

ゴフマンの会話的相互行為分析

アーヴィング・ゴフマン 著 薄井明 訳
ゴフマン社会学を読み解くうえで必須の
博士論文の翻訳がついに登場。 4400円

感情表現という言葉を読解

表情を「交渉」から考える

マーク・チャンギー／ティム・バーバー 著 佐藤弥 監訳
益田靖美 訳 人はなぜ表情で感情を表すのか？表情の
進化を「交渉」の観点から体系づけ、心理学・認知科
学分野に新たな理論的視座を示す意欲作。 3520円

誠信書房 Tel 03-3946-5666
SEISHIN SHOBO 東京都文京区大塚 3-20-6

長谷川寿一・長谷川真理子
大槻 久・齋藤慈子・香田啓貴

進化と人間行動

第3版



生物としてのヒトという視点で心・からだ・行動の適応を読みとくロングセラー、待望の改訂版。

2,970円(税込)

UTP 東京大学出版会

〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
<https://www.utp.or.jp/>

創元社

◆シリーズ完結！ 河崎吉紀 著
近代日本メディア議員列伝・15巻

近代日本メディア議員 人名辞典・付総索引

四六判・上製・372頁 定価2970円
第1回総選挙から第39回総選挙までの1000年で
当選した衆議院議員のうち、メディア関連議員
904名を収録。人名索引も充実。

大阪市中央区淡路町4-3-6(税込)

TEL06-6231-9010 / FAX06-6233-3111

世界をつなぐ観測プロジェクト
本間希樹 著(国立天文台水沢VLT観測所所長
2019年に発表されたブラックホール直接撮影
の日本側リーダーによる、本邦初の書下ろし。丹念
な筆致から研究の醍醐味を味わう。 ●1980円



見えないブラックホールを見る

支援に埋め込まれた構造的暴力
大人に抵抗し、薬や自傷に頼り、それでも私は
「回復していた」。サバイバーが鋭く突きつける、
支援とは何かという問いの刃。 ●2420円



「回復」という毒

風間暁 著



日本評論社

03-3987-8621 (営業部)
<https://www.nippyo.co.jp/>

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 表示価格は税込価格

本邦初訳！
ちくま学芸文庫オリジナル

ジャック・デリダ

鵜飼哲 訳

言葉の眼

——深淵と火山

復讐とは何か。

ヘブライ語現用化問題の危機を示唆した
シヨレムの書簡を引き、シオニズムへの脱
構築的アプローチをはかるデリダの異色作。
訳者による詳細解説を付す。 ●定価1320円

筑摩書房

※定価は10%税込です。
<https://www.chikumashobo.co.jp/>

ブックサービス ☎0120-29-9625(フリーコール)

ミネルヴァ日本評伝選

太宰治

—尊重すべき困った代物— 安藤宏著

無頼派として時代の寵児となったその生涯、近代を代表する文豪たちとの関係に主軸を置いて描き出す。 税込2970円

井伏鱒二 ハナニアラシノタトヘモアルツ 税込3850円

滝口明祥著

芥川龍之介 精神の自由を尊重するなり 税込3850円

高橋龍夫著

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込／宅配可

ギヨーム・パイヤン 著 亀井大輔 訳

ハイデガー伝

カトリシズム、革命、ナチズム
哲学者はナチズムになぜ心酔したのか？
ハイデガーの変転する運命を辿り、政治的実存を探究。彼の闘争がわかる、決定版の伝記。 ●9680円

ミハイル・バフチン論

「ロゴス圏」探求のために 大石雅彦 著 ●7150円

その思想の根本問題を出来事、言語、身体と見定め、徹底的に読み解く未曾有のバフチン論。多孔的で未完結の全体像がここに生成する。

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 ●価格税込

近代美術の巨匠前田青邨の門下、中村春泥が忠実に描写した貴重な甲冑写生図八五！ 『内容案内』呈

甲冑写生図集

中村春泥 遺稿 新装版

鈴木敬三編集・解説 38500円

各地に残る甲冑の良品を写生した遺稿を精選。有識故実の権威、鈴木敬三による甲冑史の概説や各写生図の解説から成る「図集解説」と合本にして復刊。カラー図版多数。

広田弘毅

【人物叢書330】 波多野澄雄著 2530円

A級戦犯として死刑となった唯一の文官の人物像に迫る！

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2-8
☎03-3813-9151 税込

語り、聞く 沖縄の戦世 戦中・戦後の生活史

戦時の経験の聞き書き企画が待望の書籍化。聞いたから残せた、三〇の人生。沖縄タイムス社編 石原昌家解説 三六〇円

人と土地 台湾 1945-1966

阮義忠 台湾の原風景の中に多様なエスニシティをもつ人々が生きる姿を捉えた写真＋エッセイ。栖来ひかり訳 三六〇円

シビラの書 グレーテンベルクの秘密

ヴェツチエ 十五世紀前半、戦争と疫病で荒れるドイツ。欧州初の印刷は異端の書？ 歴史小説 日高健一郎訳 六六〇円

このありふれた星屑は

タウンゼンド 愛する娘と妻があいついで脳腫瘍に。科学者の父／夫がつづる、喪失と再生の記録。梅田智世訳 五九〇円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷2-20-7 www.mszo.co.jp

2026年8月25日発行 年3回発行 第153号

発行所 人文会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7 みすず書房内

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉